提言に関する意見

上 杉 邦 憲

Ⅰ．準天頂衛星システムについて

本提言（原案）は「宇宙開発利用の戦略的推進のための施策の重点化及び効率化の方針について」であり、宇宙開発体制について触れられていないため、片手落ちの感は免れないが、それは概算要求提出期限を控え止むを得ないとしても、重点化の中で準天頂衛星システムを最優先としたことをあまりに強調した記述となっているように思う。

例えば、「準天頂衛星システムの意義」の項で：

②産業、生活、行政の高度化・効率化に寄与する。

とあるが、極めて一般的な文言であり、具体的にどのような寄与をするのか全く不明。このような言い方ならば、他の実用衛星全てに当てはまる文言ではないか。

③アジア・オセアニア地域にも同機能が展開可能であることから当該地域への貢献と我が国の国際プレゼンスの向上に寄与する。

この点は、小生が従来から準天頂衛星システムの意義として必須と主張してきたものであるが、実際に展開可能との見通しがあるのか？「寄与する」と断言するなら、具体的にどのような案があるのかを示すべきである。

準天頂衛星システムについては「**一将功成って万骨枯る**」ことなきを望むものである。

ＩＩ．宇宙科学について

宇宙科学に関し、本提案では「JAXA 内では ISAS にプロジェクトを一元化し、理学・工学の双方の学術的視点からの評価の下で宇宙科学プロジェクトの優先順位付けを行って、**スケジュールの見直しを行いながら**、一定の予算規模で学術コミュニティーと一体となって継続的に実施すべきである。」と傍線部分が追加されている。

「スケジュールの見直しを行いながら」とは「予算実行を遅らせて」と同義語であり、即ち実質的に「予算削減」を意味すると理解せざるを得ない。

歴史を小林虎三郎の「**百俵の米**」まで遡るまでもなく、我が国が現在あるのも学問・教育を何よりも重視してきたことに依るところ大であり、それが宇宙基本法や本専門調査会に述べられている宇宙科学の「独立性の尊重」の認識に繋がっている。即ち上記文中の「一定の予算規模」はわずか７文字ながら極めて重い意味を持った言葉である。

従って、この言葉に予算削減を意味する言葉を被せるのは、まさに自己矛盾であり、「**羊頭を掲げ狗肉を売る**」と言える。勿論「一定の」と言う言葉は、具体的予算額を規定したものではなく、国全体の予算規模に応じて増減があることは当然である。従って、そこへわざわざ「スケジュールの見直しを行いながら」という蛇足を付け加えるのは、本専門調査会の提言としては、極めて不適切と言わざるを得ない。　　以　上